

分つて搜索に赴き、留まるは僅に通譯外一名あるのみ。垂馬一頭の逸失は、敢て發程に差支へなきも、搜索に赴きたる人々の歸り來らざりし爲め、更に一日を同地に送るの已むを得ざるに至れり。落日光淡く、暮雲山々を罩むる時、人々歸り來る、悄悄たるの狀は、遂に獲る所なかりしを察せしに、果して予の推測に違はざりき。さるにても逸馬何處に行きしや。後に聞けは、彼の馬は其舊棲なる巴爾汗丹溝バルハンタンゴルに還り在れりと、蓋し途上牧草に乏しかりし爲め、彼は望郷の念已み難く、逸し歸りしものならん。

烏魯木齊  
への捷路  
と汗王府

十九日行くと數町、忽ち北方に走る一谷道あり。博庫丹溝ボクタンゴルと稱し、即ち烏魯木齊への捷路にて、六日の行程、途上峻嶺なく、騎行容易なりと。其の叉路より約三里、右折せる谷地には、松樹多く水草茂り、所謂巴爾汗丹溝バルハンタンゴルの良谷、吐爾扈特汗王府衙門の所在地なりと、哈布察河は此處より、右折南流し、水量漸く、多く或は懸りて急湍と爲り、或は漚りて深淵と爲り、尺餘の川魚潑刺し、大理石の白岩、碧流と相映じ、架するに奇橋を以てせり。河岸概ね絶壁、往々全山大理石より成るものを見る。斯る有用の石料も、蠻族游民の間に在りては、一抔の土塊に均し。現に土人は之を焼て石灰